審査員特別賞

青の現実

学校法人 大阪初芝学園　初芝立命館中学校　２年
伊藤　颯将

僕は海が好きだ。父の誘いもあり、十一歳でダイビング免許を取得、それから毎年沖縄の海を潜りに行っている。飛行機から眺める沖縄の海はまさに絶景、海面全てがブルーに覆われてすぐにでも飛び込みたい気持ちになる。

ダイビングは、港から潜水ポイントまで船で向かう。ダイビングし初めは乗船中にただただ海面、景色を眺めるばかりだった。しかし、最近の海は、水面にペットボトル、ビニール袋と、ひどい時にはタバコの吸殻まで浮いている。下を見れば底が見えるほど透き通った海にとても残念な気持ちになる。陸から流れて来ているのか、レジャー船からのポイ捨てかは分からない。僕は、普段気にしていなかった光景に違和感を覚えたまま潜水した。普段は水族館の中を泳ぐような感覚でゴミなど気にせず海中生物を父と探していた。頭の中にゴミの事があったので生物より何か浮かんでいないかが気になって仕方がなかった。今まで気付かなかったが父の腰には網袋があり、その中には海中で拾ったゴミが入っていた。潜り終えて、父に尋ねると「最近はゴミが多くて生物の危機だから気付いたら少しでも回収するようにしている」と答えた。父は、海中を楽しんでいるだけかと思ったがそうではなかった。本当に海を大切にしてるのだと、はじめて知った。飛行機から眺めていた絶景の今を知ったショックな気持ちは今も忘れる事が出来ない。それから、ダイビングショップ主催のビーチクリーンボランティアに参加するようになると、海よりもビーチのゴミの量に衝撃を覚えた。パンフレット、SNS で見る景色と、同じ場所とは思えなかった。そのゴミが海に流れ、ウミガメなど海洋生物の天敵となり生物体形まで壊してしまう。全世界に繋がる海、一人一人のゴミ捨ての意識を変えなければ日本だけでなく他国まで汚してしまう可能性がある。これからは、ほんの小さなことかも知れないが、ポイ捨てする人に注意する勇気、ゴミが落ちていれば嫌がらず自ら拾う気持ちを前面に出し、まず一つから行動していきたいと思う。

現在、海水を飲み水に変える装置の開発が各国で進んでいる。水不足の国にとってはすぐにでも欲しい装置であろう。しかしその画期的な装置が実用化されるまでには今の海を綺麗な海に戻したい、全世界の皆が同じ気持ちを持てば、装置実用化より先に必ず綺麗な海が戻ってくる、そう信じ、僕には一気に世界を変える力はないかもしれない、だけど僕は出来る事から率先しまず一歩踏み出していきたい。

だって海が好きだから。